

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会 会報

2018年1月19日

51号

発行者 鈴木 克彬

発行所 ぐんま日独協会

〒371-0105

群馬県前橋市富士見町石井 2445-219

電話 : 027-288-4297

E-mail : info@jdg-gunma.jp

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページ右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



【2017年11月28日 ヴェアテルン大使とのレセプションにて】

1. 会長のことば	2
2. ヴェアテルン大使講演会・レセプション	3
3. 「ベルツ博士とぐんま」講演会・パネル展	4
4. ドイツ炭鉱派遣の思い出 (連載-3)	5~7
5. 日本百名山 - 独訳 (連載-2)	8~10
6. デザイナー修行奮闘記 (連載-10)	10~11
7. 設立30周年記念行事計画	12
8. 高崎経済大学交換留学生交流会報告	12
9. 2017年度法人会員紹介	12

1. 会長挨拶 ・ アスパラガス戦争とシュレーダー政権

会長 鈴木克彬

皆さんは昔ドイツで『アスパラガス戦争』という社会現象が起こっていたことをご存知だと思います・・ドイツ旅行の際、皆さんはきっと、ウドみたいな太いアスパラを召しあがったことがおありでしょう。あの美味しいドイツ料理『シュパーゲル』のことです。

実はこのアスパラ、キズを付けずに掘り出し、収穫することは、大変な重労働なのだそうです。そのため当時、多くのドイツ人達の間で、“その作業は外国人労働者にまかせ、自分達は失業保険で生活する方が得だ”という社会現象が生まれたとされています。

これは当時のドイツ社会の姿の一つですが、1990年代後半のドイツは全般的に経済が停滞し、失業者は増加傾向、コール政権は苦悩の道にあったといわれています。

この現状に対し1998年、政権をとったのが、ドイツ社会民主党（SPD）のシュレーダー政権です。シュレーダーは、国力を豊かにすることを第一目標に、国民が真面目に働くこと、努力することを国民に求めました。

『アジェンダ2010』といわれる改革案です。この政策は年金取得年齢のアップ、失業保険の取得厳格化等々、労働者には厳しくする一方、国家財政と産業界復活を優先する『ドイツ国の再生計画案』でした。

本来SPDは労働者の味方であり、その支持に基づいて成り立っている政党です。その政党が『国家経済優先、労働者は我慢』、との政策を打ち出したのです。もともと経済界寄り政党のキリスト教民主同盟（CDU）やキリスト教社会同盟（CSU）は勿論賛成です。シュレーダー政権の提出議案はどんどん成立してしまいました。そしてこの政権8年の間に、ドイツの経済力、国家財政改善の骨格が出来、ドイツは再びEUの盟主に復活したといわれています。

しかし、シュレーダーのSPD政権は、国民の人気・支持を失ってしまい、2005年の選挙では、メルケル率いる保守的傾向の強いCDU政権に完敗してしまうのです・・有識者によっては、メルケル政権は、シュレーダーの構造改革のお蔭で長期政権になっている、と発言している人もいるくらいですが・・

一方日本です。自民党長期政権は、経済優先、社会保障費の拡充等を理由に赤字国債を増発しています。一時、野党（民主党）政権が誕生しましたが、政策上のいくつかの失敗により、国民は元の自民党政権に支持を戻してしまいました。

現政権も、過去経験のない少子高齢化による社会保障費の拡大、国際情勢の変化等による防衛費増等により、財政再建は次にして赤字国債を発行しています。

必要な、立派な政策と国民の人気は、相反することが多々あるかも知れませんが、しかし、国民として、時には我慢する政策も必要ではないかを感じる今日この頃です。

2. ヴェアテルン大使講演会・レセプション

2017年11月28日（火）、ヴェアテルン大使が来県され講演会とレセプションが行われました。「大使が見た日独の違い」というテーマでぐんま日独協会会員を主体とし一般人も交えての講演会で、群馬県の後援で県庁舎2階のビジターセンターで行われました。

第2次大戦後の復興からして両国では環境の違いがあった。ドイツは近隣諸国との友好を進めることから、戦争責任国として謝罪が必要であった。日本はアメリカ・欧州との関係を重視することから近隣諸国への戦争責任の取り方が違ったようだ。



また東日本大震災に関して日本では津波に対する報道に重きが置かれたが、ドイツでは圧倒的に「フクシマ」に重点が置かれた。原発ゼロへの対応にもつながっている。

ドイツは経済的に優等生であるのに対して、日本は国の借金が膨大でドイツに見習うべきだとの考えがあるようだが、ドイツも借金に苦しんでいて前政権の時に大ナタをふるって財政再建に取り組み、現政権はその結果の上に成り立っている。そのことをよく理解しておく必要があると指摘されました。

講演会終了後は、県庁舎の向かい側の群馬会館に場所を移しレセプションが行われました。会長挨拶では、2018年がぐんま日独協会設立30周年記念になり11月に記念式典が行われることが発表され、ヴェアテルン大使にも是非お越しいただきたいと要請があり、大使からもその時にまだ大使として日本にいれば再度群馬県に来たいと応じられました。また、双方から記念品の贈呈がありました。



挨拶の後、2011年の日独交流150周年記念としてドイツ大使館から寄贈された菩提樹の木5本が植えられたホテルグリーンプラザ軽井沢からその時の様子と現在の成長した姿を写真で披露されました。その後、大使を囲んで次から次への懇談の輪が続き、大使と通訳の石川さんは食事も取る暇もなく忙しく対応されました。



最後に、ドイツの歌を全員で合唱して楽しいレセプションを終える時間となりました。

3. 「ベルツ博士とぐんま」講演会・パネル展

第7回「ドイツフェスティバル in ぐんま」で開催した「ベルツ博士とぐんま」のパネル展が好評で、前橋市からは是非もう一度多くの市民・県民の方に見ていただきたい、とのことから前橋市中央公民館との共催で12月18日～25日にパネル展を開催しました。



温泉には詳しい群馬県人・前橋市民にとってもベルツ博士が興味を抱いた川中温泉に関してはあまり知られておらず、どこにあるのですかとか、日本では比較的なじみの薄い飲泉については、伊香保温泉の飲泉所はどこにあるのですか、などといった質問もありました。12月18日～25日の8日間でパネル展への来場者83名、うち説明を聞いてくれた方48名という成果を得られました。

12月24日（日）には中沢康治先生による講演会がパネル展の一環として行われました。ベルツ博士がカルロヴィヴァリ（チェコ）やバーデンバーデン（ドイツ）を念頭に理想的温泉保養地を実現しようと草津に土地を購入したエピソードも披露されました。結局は明治29年、当時の草津町議会は外国人に温泉引湯の権利を渡すことはできないとして、ベルツの出願を許可しなかった。それから8年後の明治37年、世代交代後の草津の若手に支えられて再び草津に入り、開発を企画したがベルツ自身明治38年にはドイツに帰国することになっており、後を託すことになった教え子の中島守信医師も日露戦争の中で亡くなり、ベルツの夢は実現することがなかった。このような経緯を裏話も交えて披露されました。

また、草津温泉水を入浴以外に応用した例として「草津の湯灯り」や「温泉蛍」などの発電作用を実験を交えて披露されました。これは草津の温泉には硫酸基が入っていることで可能になるとのことです。さらに、この温泉電池からわかったことは酸性温泉水が放電しているうちにアルカリ性になっていくことです。これにより石灰岩を多量に使用して環境問題のCO₂を発生させながらの現在の中和を環境問題を発生させないで実現できる可能性を秘めている、と熱く語られました。



4. ドイツ炭鉱派遣の思い出 - その3 (對馬 良一 記)

「ハイム・オーバーシュア」

ゲンルゼンキルヘン市ボニフェルト・シュトラッセ32番地、これがドイツ派遣日本人の宿舎「ハイム・オーバーシュア」のアドレスである。大きな門を通過して煉瓦塀の中に立坑があった。この立坑は排気立坑であり、そばの扇風機室に吸出し用の大型扇風機が設置されていて、街の地下の坑道を通過して暖かい空気が地上に排出されている。

冬の街は午後4時半くらいになるとルールの空はもう暗い。夜のような街を散策すると、たちまち衆人監視の的となる。日本人を見るのは初めての人が大半で好奇心が強いようで哲学的な顔で、じっと眺めて足元へ移し、再び顔へ戻る。こちらが照れ笑いをしてもニコリともしない。宿舎から10分も歩けば中心街であり日本人は好奇の対象である。街を歩くと子供たちにサインをねだられる。

街の景観は日本とは何もかも異なっていた。工業地帯の裏町でも、電柱のない整然とした街並み、舗装街路と歩道、道路標識と街路銘板の規格化統一された美しさがあった。日本の裏町の様な木造家屋や糞尿の臭いといった処は皆無である。古い煉瓦の街には重厚な生活文化が保存されている。確かに日本の炭鉱街と見るものすべてが整然としていて炭鉱長屋の住居と雲泥の差である。

ドイツに着いてしばらくの間は散歩するのも正装でした。私達の派遣労務者には、眼鏡をかけた人は一人もなく、威風堂々とした人たちが多く、仕事に就くまでドイツ語と炭鉱用語の講習があった。三年以上の炭鉱経験者であるので仕事は出来るわけだが、語学ができなければ坑内に入ることは出来ない。



最初の1か月は坑外作業である。一日おきに語学と作業であった。日本の熟練鉱員もドイツでは新米鉱員でした。語学の成果は鉱山監督署の試験に全員問題なく合格で監督官を驚かせた。仲間には一流大学卒の学歴を有する者や、柔、剣道の有段者、労働組合の幹部経験者など、多種の前歴の人たちであった。

先陣の仲間にはドイツの炭鉱技術勉強のため、明治鉱業出身の東大卒の矢部隆二氏が鉱員として派遣されていた。1年後連絡員に昇格して我々の世話役となったが将来、明治鉱業の社長か副社長と言われていた人で、帰国時、会社が閉山、安宅産業に移籍、その安宅産業も倒産、数年前に他界された旨の連絡があった。惜しい人です。 合掌

出勤初日に作業着が支給されたが、体格的にはドイツ人に見劣りしない体躯であるが体系が違う。作業用シャツを首回りに合わせると袖が長すぎ、ウエストにあわせたズボンも長すぎ、プラスチック製のヘルメットは頭の左右に圧迫され、前後は隙間、キャップランプを着けるとヘルメットがお辞儀して目が隠れる始末、革手袋の中で指が遊ぶ。ドイツの規格では着心地、履き心地、かぶり心地いずれも悪いが我慢して体に馴らすしかない、同僚の九州工業大学の高口氏の著書「地底の客人」に記述している。

坑外作業ではトラブルもあった。日本人は決められた作業を済ませて休憩、ドイツ人はゆっくり牛のように働き続ける、仕事を終え休んでいると小生意気な復員軍人らしい男が、「ヤプス」と言う言葉を発した途端、血気盛んな三井鉱山出身の柔道三段 O 君が“Was hast du gesagt”、突然掴みかかり大柄なドイツ人を投げ飛ばした。以後ドイツ人が日本人を見る目が変わった。日本人は怒らせると怖いと・・・・・・・・

ドイツはヨーロッパの中心地で第2次世界大戦では日本より先に終戦を迎えていた。しかし同じ敗戦国でありながら国の復興速度はくらべものにならないほど早かった。着任当時、エッセンの街の住宅の壁にはまだ所々に生々しい銃弾の弾痕が見られていたが短期間で消えていた。

ドイツと日本の炭鉱の機械化は格段の差があった。日本の炭鉱経営者は、炭鉱技術をドイツから学び機械を購入していた。私が日本の三菱炭鉱に入社したのは、ドイツ製の機械が導入されていてその機械の操作員としての採用でした。

ブリーデンという機械で、石炭の採掘跡を空気の圧力で 20 mm 程度に粉砕した岩石で充填する作業でした。ドイツ製の機械の頑丈さと優秀さに驚いたことを思い出す。

炭鉱員の住宅に関しては、日本は長屋でトイレは共同使用だった。洋式トイレは皆無でドイツにきた当時は戸惑った仲間も多くいた。ドイツの炭鉱各社は会社によって福利厚生や自然条件、住宅条件など大きな差があった。特に私たち Gelsenkirchen は他の鉱山に比べ非常に悪かった。

日本とドイツの炭鉱との作業条件などは記録として残してあるが難しい炭鉱用語や作業等について、今回はすべて割愛します。

1958年2月17日（火）、ドイツに着いてから初めての見学旅行がケルンのカーニバルである。カーニバルについての知識もなく謝肉祭と聞いていたが、驚いたことにバスを降りて街に入った途端、大勢の女性に囲まれ無理やり？顔中にキス

された。唇を真っ赤に塗り、誰でもかまわずキスをして歩く。交通整理のお巡りさんの顔もキスで真っ赤でした。日本では考えられないお祭りでした。

カーニバルでは1年後の下宿の時に面白い思い出があった。卓球クラブのカーニバルの集いに参加した時のことである。当日は下宿の奥さんが家事を一切しない。旦那の Herbert が食事の仕事もすべてやっていた。クラブの集いに行くとき、奥さんの Helga が「對馬、今日はこのネクタイを締めていきなさい」と、よれよれの古いネクタイを持ってきた。「今日はパーティーだからこちらのネクタイをしていきます」と、言っても無理やり古いお粗末なネクタイを着用させられた。そのままパーティー会場についた。異様な感じがした。衣装や化粧が普段と違う。”Guten Abend”と挨拶を終えた途端、大勢の女性群に囲まれ、顔中キスの雨、それから数人の Frauen が大きなハサミで、よれよれのネクタイをチョン切った。驚いている男性会員も手をたたいて皆で大笑いをしていた。下宿のヘルガ夫人が会員の女性たちと相談していたらしい。見ると男性陣は誰もネクタイを締めていない。カーニバルは11月11日に始まり2月の、謝肉祭前日の、薔薇の月曜日 (RosenMontag) に終わるとのことでした。

通常は真面目に生活するが、この日だけはどんなに馬鹿げたことも許されると聞いた。3年目のカーニバルには日本の着物を着て参加した。女性会員は、今年は對馬のネクタイが切れなくて残念だと言っていた。



また、近所の酒場のカウンターに見世物のように、良質の切られたネクタイが数日吊り下げられてあったのを見たことがあった。会社の嫌われ上司が店の女性店員に切られたのだと面白可笑しく語ってくれた。カーニバルについては宗教的ないろんな意味があると思うが、ドイツで生活した23歳当時の若い時代の忘れられない思い出である。

ドイツでは10月生まれの子供は当時カーニバル子と言っていた。

(続く)

5. 日本百名山 87 白山 (2702 m) ドイツ語訳その2

深田 久弥 作 深田 勝弥 訳

Japan hundred berühmten Berg Nr. XX Haku-san (2.702 Meter)
durch FUKATA Kyuya
Probeübersetzung von FUKATA Katsuya

87-07

北陸の冬は晴れ間が少ない。たまに一点の雲もなく晴れた夜、大気がピンと響くように凍って、澄み切った大空に、青い月光を受けて、白銀の白山がまるで水晶細工のように浮き上がっているさまは、何か非現実的な夢幻の国の景色であった。

Die Region Hokuriku hat selten schönes Wetter. Wenn zufällig der Mond am wolkenlosen Himmel und in der gefrorenen Luft scheint, glänzt der silberfarbige Hakusan wie Bergkristall. Diese Aussicht war so unwirklich, als ob ich in der traumhaften Welt wäre.

87-08

白山の開基は養老元年（717）僧泰澄によって成されたというから、わが国で最も早く開けた山のひとつである。万葉集にも詠まれている。当時文化の中心であった京からみちのくへ向かう旅人が、北陸路にさしかかって、まず目にふれる雪の山は白山であった。そしてあまりに真白なのに驚いたに違いない。古今集以後にも白山はよく出てくるが、多くは雪深い山として歌われている。弁慶を連れた義経の一行も、奥の細道に疲れた芭蕉も、この白い山を仰ぎながら、その下を通って行った。

Der Sage nach, der Mönch namens Taichoh 717 (1.Yohrou Zeit) stieg zum ersten Mal den Hakusan auf, deshalb der ist einer der frühesten erschlossenen Berge und stehen die Gedichte über sie in der ältesten Anthologie Manyohshu. Als die Reisenden, die von Kyoto, damaliges Kulturzentrum, nach Hokuriku gingen, sahen sie unterwegs am ersten den schneeigen Hakusan. Zugleich mussten sie sich sein Blütenweiß wundern. In vielen Anthologien seit der Kokinschuh wurden die Gedichte über Hakusan meistens als ein tief schneeigen Berg aufgenommen. Der flüchtige Trupp von Yoshitsune und Bennisuke und danach 500 Jahren als der Haikusdichter Bashoh auch auf der Reise in diesen Hinterland müde war, auf dem weißen Berg aufblickend, waren alle daran vorbeigegangen.

87-09

白い山という名を持った山は、欧州にモン・ブラン（モンは山、ブランは白）があり、ヒマラヤにダウラギリ（ダウラは白、ギリは山）がある。そしてわが国の代表は白山である。祭神は比咩神で、比咩は姫であり、越中立山の雄勁な山勢の雄山

神に対して、加賀白山の優美な山容を比喩神として崇めたと伝えられる。確かに白山ほど、威あってしかも優しい姿の山は稀だろう。

Der Berg, genannt Weiße Berg sind der Mont blanc in Europa, der Dhaulagiri in Hymalaya (Dhaura bedeutet weiß, giri Berg) und Hakusan in Japan. Die Gottheit des Hakusans ist die junge Göttin namens „Hime“, dagegen ist die Gottheit des Tateyamas der strenge Gott namens „Oyama“. Man sagt, dass der Hakusan wegen seiner Schönheit als Göttin angebetet wird. Solcher Berg muss selten sein, so würdevoll und mild wie der Hakusan.

87-10

仰いで美しいばかりでなく、登っても美しい山である。匍松と高山植物に覆われた頂上にはいくつかの旧火口があって、そこには紺青の水が湛えられ、それに配する雪渓や岩の布置が、天然の庭園のような趣である。しかも夏期登山者で賑わう頂上付近を少し外れると、原始のままの静かな気持ちのいい場所が、ほとんど汚されずに残っている。

Er ist schön dabei nicht nur zu ihm emporzublicken, sondern auch aufzusteigen. Es gibt einigen alten Krater auf dem obersten Platz, wo von der Kriechkiefer und den Hochgebirgspflanzen bedeckt ist. Der Kratersee füllen sich mit ultramarinem Wasser. Das Arrangement der Schneeschlucht und der Felsen ist wie ein gut gepflegte Naturalgarten. Zwar viele Bergsteiger scharen sich im Sommer auf dem Gipfel, aber außer hier bleibt die urzeitlich stille und gemütliche Umgebung ohne Schmutz übrig.

87-11

私をはじめて登ったのは中学生の時、夏でも雪のある山へ行ったのは、それが初めてであった。それまで故郷の低山ばかり漁っていた私にとって、白山登山はまさに私の山岳開眼であった。それ以来私は幾度白山やその周辺を探ったことだろう。

Es ist mir zum ersten Mal, als Mittelschüler war, habe ich im Sommer den mit Schnee bedeckten Berg bestiegen. Weil ich bis zur Zeit nur auf den niedrigen Bergen gewandert war, war das Bergsteigen auf dem Hakusan für mich große Entdeckerfreude. Wie viele Mal habe ich seitdem den Hakusan und seine Umgebung besucht.

87-12

白山について語り出せばきりが無い。それほど多くのものをこの山は私に与えている。

Der Hakusan hat mir so viel beigebracht, dass ich über ihn endlos rede.

10. März 2017

鯉のぼり 白山白し 空白し

勝弥

Karpfenbanner bunt,
der Berg „Hakusan“ ist weiß,
der Himmel auch weiß.

Katsuya

日本人はたいていふるさとの山を持っている。

続く

事務局註：

深田勝弥会員は作家故深田久弥氏の甥という関係から名著「日本百名山」の独訳に挑戦されています。百名山の順番に従って掲載するのが常套ですが、第1回目は深田久弥氏の故郷である石川県にある白山から始めます。スペースの関係で「白山」を2回に分割しました。

6. デザイナー修行奮闘記 - 連載 11 (井上 晃良 記)

私の「鉄道デザイナー」への道

2つのホームステイ

ブレーメンでの語学学校は1コース2ヶ月である。1コースが終了すると数日の休みがあり、再び新しいコースが始まる。私は最初の1コースを寮生活で過ごしたのだが、やはりルームメイトが日本人であり、授業後も何と無く日本人と一緒にあって昼食を食べに行くという毎日のパターンに少なからぬ危機感を覚えていた。語学学校で授業を受ける生徒は、それぞれ異なる目的があり、私の場合は大学入学である。その目的を達成する命題がある一方で、まだドイツ語も間々ならない私自身が日々の生活で日本語を話せなくなるのは精神的に耐えられそうにないので、やはり授業後は他の日本人同様同じ母国語を話す者同士が集まるのである。

ルームメイトの日本人学生とは気が合い、先のドレスデン冒険旅行を始めよく行動を共にしたのだが、彼も私と同じ思いであったのかも知れない。彼は、次のコースを罰の場所のゲートに変えたのもそのためであろう。私自身もまた次のコースで再び日本人と同室で日本語ばかりで生活することに問題を感じていたのである。そこで語学学校がホームステイを斡旋してくれることを知り、2コース目にはホームステイを選んだのである。これは語学学校がホームステイの受け入れ先を幾つか持っていて、希望者の条件にあったステイ先を紹介してくれるというもの。寮と同じ金額

でステイできるのも好都合であった。そこで私もステイ先を申し込んで、ドイツ人家庭でステイを始めることとなった。

そこは、ご夫婦と3人兄弟の子供のいる5人家族の家庭である。まず、1度ステイ先を訪ねて、お互いの受け入れが出来るかどうか決めるのであるが、私は一人っ子なので兄弟の居る家庭を知らなかったが、どのみち初めてのホームステイであるし、ステイ先の良い悪いについては自身の基準もなかったので、私は断る理由もなくすぐに決めたのである。ステイ先も私に好感を持ったようである。ステイ先の所在地は、路面電車の終点から歩いて数分の郊外住宅地である。毎日路面電車に乗って学校への往復をし、また帰宅後はドイツ人家族の中でドイツ語漬けになることで、少しでも会話力を上達させようと試みたのである。

この家庭の奥さんは、3人の育ち盛りの男の子を育てている真っ最中で、その豪快な仕草など男勝り言えるような感じであった。ご主人は一見強面だが、根は優しい人であることはすぐに理解できた。時々1番下の小学生の男の子の子守りをさせられた

が、彼の話すドイツ語は基本的な単語が多いので、私との会話はあまり困らなかったし、彼からも沢山のドイツ語を学ぶことができた。やはり、家庭の中に入っての生活は、語学とは違う必要に迫られての実習でもあり、勉強になったのは確かな事実である。一方、家庭の中では話が通じないことも多々あったが、しばしば辞書を見ながらの家族とのコミュニケーションは、大変ながらも得るものは大きかった。

ちょうどその頃である。私が子供の頃から憧れてやってきた西ドイツで、見るもの聞くもの全てが新鮮で興味深くあったものの、少しその生活が慣れて来たためであろうか、また先の不安があったためかも知れないが、理由もわからずホームシックにかかってしまった自らを発見したのである。自分の思いとは裏腹に日本に残した母や友人に無性に会いたいという気持ちなのであろうか。その時母から届いた手紙を読みながら涙が出て来たのである。その時の私は冷静で「これがホームシックなのだ」とすぐに理解できたことを憶えている。そのような日が一週間も経った頃、何がきっかけということもなくスッキリしたのである。これを最後にその後9年に及ぶドイツ滞在中一度もホームシックには掛かっていない。それ以来、ホームシックというものは一過性の物であり、誰でも経験するもの。そして別に恥ずかしくもないものということが理解できた。

(続く)

(本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 03』に連載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。)

7. ぐんま日独協会設立 30 周年記念行事計画

1. 記念式典

日時：2018 年 11 月 11 日（日） 11:00～12:00

場所：昌賢学園まえばしホール 第 5 会議室

2. 記念音楽コンサート（有料）

日時：2018 年 11 月 11 日（日） 13:30～15:20（開場 13:00）

場所：昌賢学園まえばしホール 小ホール

3. 記念誌発行

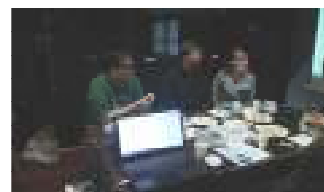
記念誌発行委員会を立ち上げて 10 月中に完成させます。記念誌発行に関心のある会員を公募します。2 月 28 日までに事務局までお申してください。

8. 高崎経済大学交換留学生交流会報告

2017 年 12 月 4 日（月） 18:00～20:00 に学生が運営する古民家を利用した「0 号館」にてドイツ人交換留学生 2 名と日本人学生との交流会を高崎経済大学の後援を頂いて行いました。当日は大学からもご挨拶をいただき 20 名の参加で友好ムードあふれる雰囲気の中で交流会が進みました。まずはドイツ人留学生 2 人（女性のニーナと男性のデニス）の自己紹介・出身地紹介・ドイツでの学園生活の説明を聞き、日独の文化や学園生活の違いを知りました。なぜ日本に興味を持つようになったかの質問があり、きっかけは「アニメや漫画」という回答でした。最近ではほとんどのドイツの若者からはこの答えが返ってきます。次に日本人学生による日本紹介です。6 種類の質問の中からくじで引いた番号の質問に答えます。これで日本や群馬の紹介を兼ねてよりよく留学生に知ってもらうことが狙いです。大分馴染んできたところでドイツに関するクイズコーナーです。成果数の多い人にはドイツに関する記念品が贈られました。



【ご挨拶を頂いた高崎経済大学国際交流支援チーム伊藤様（右）】



【ニーナ（右）とデニス（中央）】



【参加者の様子】

9. 2017 年度法人会員紹介（あいうえお順）

太田美つ子 様

草津町役場 様

熊川栄 様

白倉卓夫 様

少林山達磨寺 様

株式会社富運 様

ホテルグリーンプラザ軽井沢 様